

I-2 七ヶ浜町吉田浜地区

2012年2月23日(木)

報告者名	川村 清志	被調査者生年	1940年(男)
調査者名	川村 清志	被調査者属性	建設業
補助調査者	兼城 糸絵		

生活史

話者は、昭和15年生まれ、吉田浜生まれ。今年で72歳になる。

中学時代から仙台に下宿し、大学は経済学部を卒業した。「銀行勤めをちょこっとした」あとで勤めを変えて、建設会社に就職した。親からは反対されたが、これが自分に合っていたという。父親は、七ヶ浜町の役所勤めであった。

全国をあちこち転勤してきたが、現在は、七ヶ浜町内の建設会社で働いている。

震災について

吉田浜で津波で亡くなったのは5名だが、そのうち2名は仕事先など外で亡くなり、地区内で亡くなったのは3名だった。

避難所は、この吉田浜分館だった。(吉田浜の分館は、浜から急な傾斜道をあがった高台にある。位置的には、吉田神社よりも高い場所にある)。

みんなをここに収容して、浜の方に見回りに降りていったところ、ちょうど、津波がやってきた。

避難所について

震災の時、この分館に初日200人がきて、その後2カ月のあいだ、避難所となっていた。人数は徐々に減っていったが、それでも、80人ほどが避難していた。

吉田浜では、水の調達など、外からのボランティアは断っていた。地元で吉田浜ボランティアクラブ(YVC)が結成され、話者の奥さんも主要な仕事に加わっている。

例外的には、風呂作りにきてくれるグループがあった。当初は足湯をやっていたが、設計士やハウスメーカー、ガス屋などが持ち寄りで器材を集めて作ってくれた。期間は4日ほどだった。最初はありがたかったのだが、追い炊きができないなど、使い勝手が悪かったので、やがて倉庫代わりになった。自衛隊が大きな風呂のあるところまで連れて行くサービスも行われていた。

吉田浜の寺(金剛寺)も地震で被害を被った。山門の手前まで第一波がきた。お寺に避難していた人もいたので、そこからさらに公民館まで避難させないといけなかった。しかし、すでに公民館でも人が一杯だったため、最初は、公民館に連れてこないほうがいいといわれたが、とにかく、立ってでもいいから公民館にいれるということで、一カ所に避難してもらった。

実は、津波が来る十日ほどまえに町の地域福祉課と合同で避難訓練をしていた。大きな炊き出し用の鍋も持ち出してきて、炊き出しの訓練もあわせてやった。まるで、その時の様子をそのま

ま再現するようなことを行うことになった。山小屋から薪をもちだし、U字溝を使って火をつけて、炊き出しをした。

他の七ヶ浜の学校の体育館の避難所は人数が多くて、1週間たっても食料の配給が滞っており、コッペパンが1人に3分の1といった状態だったという。

避難所は、あまり大きくなくて、分散していたほうが良いと思う。支援物資もだいたい食料などは100人単位でやってくる。こじんまりした避難所が10カ所ある方が、大きな避難所に人を集めるよりうまくいくのではないか。あるところから、冷凍の魚（刺身にできる）を食べるか連絡があった（むこうも処分に困っていた）。車で取りにきたらやるというので行くことになった。リフトを使って、トラック1台に入るくらいの量。

分館では、年寄りの連中にオムツが必要な人や足の悪い人がいた。そういった人は和室に入ってもらい、比較的元気な者はホールという具合だった。

避難している者のなかにも、役場の会計係などの職にある人がいて、彼らがリーダーシップをとって被災者が自発的に作業ができるようなシステムができていった。被災者の会というものが作られている。

話者たちは、義援金、見舞金などの配当を取りにいたり、町との交渉にあたって書類を書いたりした。被災者からは要望を書いてもらい、それに沿って救援物資センターなどを物色するなど、地域と行政とのパイプ役的な仕事が多かった。

夜には、ミーティングを行ったあと、物資を配っていた。その繰り返しだった。

震災後の再建

吉田浜では28世帯流された。今後の方向は決まっている。だいたい3つのパターンがあり、1つは、もともと高台にもっていた自分の土地に家を建てる家がある。次に町が用意した70坪の土地に家を建てる世帯がある。さらに町営の住宅を建てて、そこに移り住む世帯もある。土地も町営住宅も全て吉田浜の区内にある。とくに町営住宅は分館のすぐ向かいの土地が利用されることになっている。

浜にはもう家は造らないことになっている。魚屋を営む1軒の家だけが、浜に家を建てたいと言ったが、結局、子どものいる仙台に移ることになった。吉田浜を出て行くのは、この世帯だけである。この家は吉田浜で亡くなった3人のうちの1人を出した家だった。

本来、基準に沿って、全壊でない家は取り壊せないという町の決まりがあり、厳密にはかると2軒ほどはそれにあっていた。しかし、区の方で反強制的に壊させた。もう、これだけの津波がきた以上は、浜に住ませるつもりはなかった。

他の地域は、1カ所に移ることができない。鼻節は2カ所に分かれており、菖蒲田は3カ所に分かれることになった。また、菖蒲田には町全体の住宅が建つ予定である。

吉田浜は海で亡くなった人も多かったが、裕福な人も多かった。土地をやるという人もいるくらいである。

吉田浜の祭り

獅子舞は実行委員会が別にあり、話者は名義上の会長である。

祭り自体は、旧暦の3月17日と決まっている。今年は、4月7日に神社で本祭をおこない、8日に地区内の各家をまわる予定。

大きな獅子頭があるが、現在は修繕中である。かつての獅子は木製だったが、現在はプラスチックの本体に木の耳などがついたものを使っている。獅子頭は、(なかにいた?)で作っている。獅子も酔っぱらって踊られるもので、結構、暴れる獅子舞なので、2年くらいで壊れていた。太鼓の方も3年に1度くらい張り直しが必要とのことである。

現在は修理に補助ができる。ただ、吉田浜は全戸で260～280くらいの戸数があり、一世帯あたりは2,000円くらい、包んでくれる。そのため、こちらが(獅子の補修などに)補助金を出すところだが、向こうからお金をもってきてくれることもある。獅子舞は不幸ごとがないかぎり、270戸くらいはまわっている。

昔は、厄払いするために各部屋をまわり、家の中で獅子を舞っていたが、今は庭先などで舞うことが多い。家ごとにお煮染めを作ったり、漬け物や刺身を用意していたりしたものである。最近では少なくなった。

獅子舞にかんでもらうと頭病みがなおると言っている。その他に悪い部位をかんでもらう人もいるようである。

獅子舞の実演

本祭は、朝の6時半に集合し、7時から宮で獅子を舞う。舞は10に分かれているが、通しでおこなう。本祭はそれで終わりとなり、社務所で直会となる。現在では、祭りのあとの土、日に各家をまわる。

昔は漁師が多く、朝早くに漁に出るけれど、日中は家にいるものが多かった。現在はサラリーマンが多い。この地区で生まれ育っても、現在は多賀城市などに住んでいる者も多く、そのため家を回るのは休みがとれる土日にあわせてやっている。

このため、後継者がなかなか育たない状況にある。隠れて練習をしている者が、引き継いできたが、そのような存在も減ってきている。

本祭のときには子どもはいないが、地区を回るときには子どもが獅子について回る。家によってはジュースやお菓子を用意してくれるので、子どもが喜んでついていく。そういった子どものなかから、獅子を舞いたいという者がでてくるものだった。

子ども獅子舞

かつて子ども獅子舞があった。正確な年代は分からないが20年ほど前のこと。これは、熱心な学校の先生が地域の芸能に関心を持ってきて、子供会やPTAとはかって、子ども獅子舞を作った。舞は大人の獅子舞と同じ型を覚えさせた。子どもたちをつれて県内のいくつかのイベントを回っていた。

しかし、地元での考え方の違いからその後、子ども獅子舞はなくなる。かつて獅子舞の指導にあたった先生が、校長としてもどってきて、もう一度、復活させようと言う動きもあったが、校長は2、3年ででていくので、結局、うまくいかなかった。

昨年の獅子舞

獅子舞は、平成 23 年は震災直後だったため、獅子舞をやっている場合ではないだろうということで、中止となった。

みなと祭りへの参加

塩竈のみなと祭りに呼ばれていくこともある。宮坂の入り口にあたるところで、神輿が戻ってくるにお向かえの獅子を舞う。呼ばれたり呼ばれなかったが、2年に1度くらいは呼ばれている。祭りのときには、竜王船が吉田浜までやってきて舞を奉納して、祝詞をささげる。この辺りは、皆、塩竈神社の末社だったらしいので、そのためだろうと思う。